

# 近代語彙の一考察

## 『学問ノス、メ』の語彙の性格

進藤 咲子

### 一 はじめに

福澤諭吉著『学問のススメ』（「初編」のみ小幡篤次郎との同著）は、同人著『文明論之概略』と並んで、明治初期という特別の時代が生んだ言語文化の結晶であり、今日まで常に新しい息吹きをもって読み継がれてきた、明治の古典である。

「初編」は明治五年二月の刊行であったが、八年後の明治十三年七月三十日に記した、「合本学問之勸序」に、福澤は、古来稀有の発兌であるとして、次のように述べた。

本編ハ余ガ読書ノ余暇隨時ニ記ス所ニシテ、明治五年二月第一編ヲ初トシテ同九年十一月第十七編ヲ以テ終リ、発兌ノ全数、今日ニ至ルマデ凡七十万冊ニシテ、其中初編ハ二十万冊ニ下ラズ。之ニ加ルニ前年ハ版權ノ法嚴ナラズシテ偽版ノ流行盛ナリシコトナレバ、之

近代語彙の一考察 —『学問ノス、メ』の語彙の性格—

ヲ日本ノ人口三千五百万ニ比例シテ、国民百六十名ノ中、一名ハ必ズ此書ヲ読タル者ナリ。（現行字体に直し、適宜句読点を施した。以下同様である。）

当時の、「普通」（あまねく通じる。また、共通の意味をもつ、明治のことば）の書きことばで書かれたこの書は、同時代に大きな反響をもって迎えられていたことがわかる。

なお、右の引用で分かるように、確かに「初編」は、明治五年二月に刊行されたが、明治五年本には、『初編』の名はなく、『全』となっている。なぜなら、この明治五年本は、郷里中津に学校を開くために、中津の友人たちに、その趣旨を漢字平かな交り文で認めた、言わば、全一冊のものだからで、これを一般にも刊行したのである。明治六年四月に、改めて想を練った上で、『学問ノス、メ 全』また『学問ノス、メ 初編』として、真片仮名再刻本が刊行されたのである。これが、

逐次刊行されて、十七編まで続いたのである。小稿で用いた『学問ノス、メ』は、真片仮名再刻本と記された「初編」で始まる、慶應義塾福澤研究センター所蔵の初版本である。

筆者は、八年ばかり前から、『学問ノス、メ』と『文明論之概略』の索引づくりを進めており、『学問ノス、メ』については、来年の刊行を目指して作業を行っている。小稿は、この作業から得た調査結果の一端を報告するものである。

## 二 「学問ノス、メ」の語彙構造

### —使用度数の高い語の傾向—

『学問ノス、メ』の総語彙、すなわち延べ語数は、文節を単位とした場合、約二五、二〇〇語、異なり語数は、約四、二二〇語である。約としたのは、まだ、最終的に語数を正確に把握していないためである。

使用度数の高い語という場合、ここでは、30回以上を該当する語とした。30は目安であって、別に根拠のある数字ではない。これを表1として、次に示す。なお、この表に「使用編数」とあるのは、その語が、いくつの編に使用されているかという、幅（レンジ）のことである。

表1 一〇〇語が使用度数30以上の語である。この一〇〇語の延べ語

数が、一〇、四一三語。総語数の約4割を占めることになる。

表1によると、各編すべてに用いられている語は31語である。使用度数の高い順に記すと、\*アリ、\*ソノ、\*モノ、\*コト、\*コレ、\*ヒト、\*ナシ、\*イフ、\*コノ、\*ス、アルイハ、\*マタ、ナス、\*トコロ、\*イマ、タダ、\*シル、ミル、ウ、イタル、\*ナル、ワガ、ヨ、アリサマ、スナハチ、\*オモフ、ユヘニ、\*ヨル、オホシ、タトヘバ、シャウズである。これを『明治初期の新聞の用語』（略して『新聞』と記す）所載の「第2表 使用度数10以上の表（使用率順）」と比べてみる。これは、国語研究所の報告書の一つで、明治10年10月～11年9月までの「郵便報知新聞」の語彙調査である。また、第2表というのは、使用度数50以上の語を使用率順に配した表である。比較すると、2語を除き、他の語はあらかた、この「第2表」で、使用率の高い所に位置している。また、\*印の18語は、国立国語研究所の『現代雑誌九十種の用語字』でも使用順位100位までの語（文語口語の区別せず）で、現代語の基本語彙につながる。「第2表」になかったのは、アリサマとタトヘバであった。アリサマは、『新聞』で、44回使われており、かなりの度数である。タトヘバは10回使われていた。このタトヘバは、しばしば比喻を用いる福澤にとって、なくてはならない語なのである。まんべんなく使われているのを見ても、うなずける。

表1 「学問ノス、メ」使用度数30以上の語

近代語彙の一考察  
―『学問ノス、メ』の語彙の性格―

見出し語	使用度数	使用編数	見出し語	使用度数	使用編数
アリ (有)	786	17	ステニ (既)	50	16
ソノ (其)	708	17	ミナ (皆)	49	15
モノ (者・物)	693	17	イマダ (未)	48	14
コト (事)	601	17	タトヘバ (譬)	47	17
コレ (之)	473	17	セケン (世間)	46	15
ヒト (人)	377	17	モチフ (用)	46	13
ナシ (無)	334	17	ウチ (内)	45	15
イフ (云)	322	17	ロンズ (論)	45	14
コノ (此)	315	17	ニッポン (日本)	43	13
ス (為)*	277	17	イハク (云)	41	13
セイフ (政府)	250	15	ジツ (実)	41	13
アルイハ (或)	173	17	カノ (彼)	40	15
マタ (又・亦)	171	17	シャウズ (生)	40	17
ナス (成)	154	17	テンカ (天下)	39	14
トコロ (所)	146	17	モッテ (以)	39	12
イマ (今)	145	17	ニンゲン (人間)	38	12
ジンミン (人民)	136	14	イヘ (家)	38	13
タダ (唯)	128	17	シカルニ (然)	38	14
シル (知)	116	17	シャウバイ (商売)	37	12
ミル (見)	111	17	ショクブン (職分)	37	8
ウ (得)	106	17	リ (理)	37	13
クニ (国)	98	14	ジンブツ (人物)	36	12
イタル (至)	87	17	ワタクシ (私)	36	7
ナル (成)	85	17	モトム (求)	36	11
ミ (身)	83	15	ナホ (猶)	36	14
ワガ (我)	82	17	シカリ (然)	36	15
タメ (為)	81	16	オコナフ (行)	35	13
ハタラキ (働)	80	12	コクミン (国民)	35	9
ハフ (法)	79	14	イッコク (一国)	34	10
ヨ (世)	78	17	トル (取)	34	16
ドクリツ (独立)	77	9	トモニ (共)	33	15
トキ (時)	77	15	ツクス (尽)	33	12
アリサマ (有様)	75	17	マモル (護)	33	11
スナハチ (即)	75	17	アキラカナリ (明)	33	12
ココロ	74	13	ミギ (右)	32	15
オモフ (思)	74	17	ハナハダ (甚)	32	15
ガクモン (学問)	69	11	ハナハダシ (甚)	32	13
ユヘニ (故)	69	17	シンズ (信)	31	5
ヨル (由)*	68	17	オヨブ (及)	31	16
ミヅカラ (自)	67	16	カウサイ (交際)	31	9
チカラ (力)	66	13	アタル (当)	31	12
ブンメイ (文明)	66	9	タル (足)	31	12
シタガフ (従)	63	14	ヨク (良)	31	15
ツク (就)	60	16	ミチ (道)	31	13
ガクシャ (学者)	59	13	ゼニ (銭)	31	11
モトヨリ (固)	57	16	ギロン (議論)	31	14
タニン (他人)	56	11	ジブン (自分)	30	12
カナラズ (必)	53	15	ツクル (作)	30	11
オホシ (多)	53	17	ケッシテ (決)	30	14
コンニチ (今日)	51	15	モシ (若)	30	12

一方、『学問ノス、メ』で、30〜80回使用されていた語でありながら、『新聞』では、A使用度数が低い（9〜1）、Bまったく登録されていないという語もある。これを表2に示す。

表2 『新聞』との比較

見出し	—学問ノス、メ—		新聞
	使用度数	使用編数	
学者	59	13	A
学問	69	11	A
交際	31	9	A
商売	37	12	A
職分	37	8	B
銭	31	11	A
人間	38	12	A
働	80	12	A

表2の『学問ノス、メ』の語彙は、すべての編で用いられているわけではないが、いずれも、この著作の論旨をささえる、重要なことばばかりである。使用度数の高い語の中には、どの調査にでも高い使用度数で用いられる語と、表2のごとくその著作に特徴的に用いられる語とが存在することがわかる。なお表1の、セイフ、シンミン、クニは、使用度数が高いが、『新聞』でも同様である。この時代の重要語であったと考える。セイフは今も多用されるが、現在は、シンミンは、あまり使われない。表2のシヨクブンも使われない（参照注7）。このように衰微する語もある。

以上、数量的な構造を見てきた。

### 三 各編の用語の特色

『学問ノス、メ』には、全体を通じて統一的な主題はあるものの、全十七編の各編が独立した書であると見なすことのできる、明確な主題を持つている。もっとも中には、四編の補遺が五編、九編の続きが十編といったような関係の編もあるが、そのような編でも、論旨が微妙に異なっている。

ここでは、表現内容から集約された論旨と、ある程度の使用度数をもつ語との関係を見る。ある程度の使用度数とはあくまで目安であって、6回以上使用された語とする。もちろん1語であっても論旨の展開に深くかわる語もあるが、ここでは原則として使用度数に注目し、そのなかから、内容に重要な意味を持つキーワードを取り出し、その語の用法を調査することにした。

このような観点から、各編ごとに次のように記述を進めることにしたい。

#### (一) 要旨

- (二) 使用度数6以上の語の表（表1掲載の使用度数30以上の語は\*印を付ける）

(三) 重要語(キーワード)とその用例(用例の下には、初版本の丁・

行数を示し、さらにその下に岩波文庫(改版)本のページと行  
を示した。)

(四) 「参考」各編延べ語数と異なり語数(最終の数ではない。決定語数は索引作成終了時に報告する。)

なお、以下の記述には、右の番号のみを記す。

初編 明治六年四月刊(真片仮名再刻本)

(一) 天は平等に人を造り給うたが、人間の身分、賢愚、貧富、強弱  
などの有様はさまざまだ。学問のあるなしで雲泥の差が出てくるの  
だ。学問をするには実学から入るべきだ。また、学問をして、一身  
が自由独立して他人の権理を妨げぬという分限(＝限度)を知ること  
が必要だ。これをひろげれば、一国も同様だ。分限を知って外国と  
同等に交際すべきだ。天理人道に従い行動すべきであり、これを妨  
げられたら一命をなげうって国の威光を守るべきだ。また、一身の  
自由を妨げる者があれば天理に従って存分な事をすればよい。自分  
の身に才徳を備えるため、物の道理を知るため、学問をしなければ  
ならない。以前と異なり、今日は四民平等の世になったから己の身  
分を重きものと考え、卑屈になつてはならぬ。身分に相應する智徳  
を備えて、政府に対して良政を望み、文明に赴く良民とならねばな  
らぬ。官民協力して国の太平を護るために、人は学問をしなければ

ならないのだ。

(二) \*アリ 54 \*云フ 14 \*今 7 \*学問 13 \*コト 29 \*コノ 10 \*コレ 14 \*自由

6 \*知ル 15 \*人民 8 \*ス 17 \*政府 13 \*其 43 \*互ニ 7 \*タダ 10 \*タメ

6 貴シ 10 天 6 \*ナシ 21 \*ナス 9 \*ナル 6 \*人 39 \*又(亦) 11 \*身

9 \*見ル 7 身分 10 \*モノ 10 \*由ル 6

(三) [学問]<sup>注2</sup>

(1) 身分重クシテ貴ケレバ、自カラ其家モ富デ、下々ノ者ヨリ見レ  
バ、及ブベカラザルヤウナレトモ、其本ヲ尋レバ、唯其人ニ学問  
ノカアルトナキトニ由テ、其相違モ出来タルノミニテ、(二ウ一・  
12/4)

(2) サレバ今斯ル実ナキ学問ハ先ツ次ニシ、専ラ勤ムベキハ人間普  
通日用ニ近キ実学ナリ。(三ウ一・12/14)

(3) 是等ノ学問ヲスルニ、何レモ西洋ノ翻訳書ヲ取調べ、大抵ノ事  
ハ日本ノ仮名ニテ用ヲ便シ、或ハ年少ニシテ文才アル者ハ横文  
字ヲモ読マセ、一科一学モ実事ヲ押へ、(四オ四・13/5)

(4) 身ニ才徳ヲ備ントスルニハ、物事ノ理ヲ知ラザルベカラズ。物  
事ノ理ヲ知ラントスルニハ、字ヲ学バザルベカラズ。是即チ学問  
ノ急務ナル訳ナリ。(九オ七・16/9)

(5) 仮ニ人民ノ徳義、今日ヨリモ衰ヘテ、尚無学文盲ニ沈ムコトア  
ラバ、政府ノ法モ今一段嚴重ニナルベク、若シ又人民皆学問ニ志

シテ物事ノ理ヲ知り、文明ノ風ニ赴クコトアラバ、政府ノ法モ尚  
又寛仁大度ノ場合ニ及ブベシ。(十ウ八・17/9)

〔自由〕<sup>注3</sup>

(1) 即チ其分限トハ、天ノ道理ニ基キ、人ノ情ニ從ヒ、他人ノ妨ヲ  
為サズシテ我一身ノ自由ヲ達スルコトナリ。自由ト我侏トノ界ハ、  
他人ノ妨ヲ為スト為サルトノ間ニアリ。(五オ二・13/13)

(2) 前条ニ云ヘル通り、人ノ一身モ一國モ、天ノ道理ニ基テ、不羈  
自由ナルモノナレバ、若シ此一國ノ自由ヲ妨ケントスル者アラ  
バ世界万国ヲ敵トスルモ恐ル、ニ足ラス。此一身ノ自由ヲ妨ゲ  
ントスル者アラバ、政府ノ官吏モ憚ルニ足ラズ。(A八ウ六・B八  
ウ八・16/4)

〔自由〕は、この单独用法のほか、(2)の文中に見られる「不羈自由」  
また、「自由独立」「自由自在」などと使われている。

〔貴シ〕

(1) 身分重クシテ貴ケレバ、自カラ其家モ富デ、下々ノ者ヨリ見レ  
バ、及ブベカラザルヤウナレトモ、(二オ八・12/3)

(2) 譬ヘハ政府ノ官吏ヲ粗略ニセザルハ当然ノ事ナレトモ コハ其  
人ノ身ノ貴キニアラズ、其人ノ才徳ヲ以テ其役義ヲ勤メ、国民  
ノタメニ貴キ国法ヲ取扱フガユヘニ、コレヲ貴ブノミ。人ノ貴  
キニアラズ、国法ノ貴キナリ。(A七ウ三・B七ウ四・15/7・

15/8)

〔天〕<sup>注4</sup>

(1) 天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラズ、人ノ下ニ人ヲ造ラズト云ヘリ。(二オ  
一・11/1)

(2) 諺ニ云ク天ハ富貴ヲ人ニ与ヘズシテ、コレヲ其人ノ勤ニ与ルモノ  
ナリト。(二ウ三・12/5)

ここでの「天」は造物主の意味とする。

〔身分〕

(1) 天理ニ從テ存分ニ事ヲ為スベシトハ申ナカラ、凡ソ人タル者ハ  
夫々ノ身分アレバ、亦其身分ニ從ヒ、相應ノ才徳ナカルベカラズ。  
(九オ四・16/7)

(2) 昨今ノ有様ヲ見ルニ、農工商ノ三民ハ其身分以前ニ百倍シ、ヤ  
ガテ士族ト肩ヲ並ルノ勢ニ至リ、(九オ八・16/9)

(四) 延べ語数 一、三八四

異なり語数 六六一

二編 明治六年十一月刊(一)の中は題目。以下同様。ここは二題目)

(一)「端書」学問には、有形と無形の学問があるが、どれも知識見聞を  
広くし、道理を知り、人としての職分(本分)を知ることができる。  
人は世帯上の学問も、帳合の学問も、時勢を察する学問もしなければ

ばならない。ただ、文字を知るだけでは学問とは言われない。

「人ハ同等ナル事」人々の実際の有様は、それぞれに異なるが、権理通義は同じだ。天は人に体と心との働きを与えて、権理通義を守るしかけを設けたのだ。政府と人民とは、元来権理通義が同等であるのに、政府は人民の当然の権理通義を許さない。政府と人民は、対等に職分を尽くし、法を立てて、その法を守るべきだ。人民は政府と同位同等であるために、学問をせねばならぬ。

(二) \*アリ 45 \*有様 8 \*或ハ \*云フ 30 \*学問 18 権理通義 7 \*コト

32 \*コノ 10 \*コレ 22 地頭 6 \*職分 9 \*知ル 11 \*人民 16 \*ス 12 \*

即チ 10 \*政府 21 \*其 34 \*タメ 7 \*ナシ 22 \*ナス 7 \*人 23 百姓 7

百姓町人 9 \*法 11 \*又(亦) 6 \*モノ 25 \*故 28

### (三) [有様]<sup>注5</sup>

(1) 但シ其同等トハ、有様ノ等シキヲ云フニ非ズ、権理通義ノ等シキヲ云フナリ。(三ウ七・21/7)

(2) 地頭ト百姓トハ有様ヲ異ニスレトモ、其権理ヲ異ニスルニ非ズ。(五才四・22/7)

### [権理通義]<sup>注6</sup>

(1) 即チ其権理通義トハ、人々其命ヲ重シ其身代所持ノ物ヲ守リ、其面目名譽ヲ大切ニスルノ大義ナリ。(四ウ一・22/1)

### [職分]<sup>注7</sup>

近代語彙の一考察 — 『学問ノス、メ』の語彙の性格—

(1) 故ニ百姓町人ハ年貢運上ヲ出シテ、固ク国法ヲ守レバ其<sup>A</sup> 職分

ヲ尽シタリト云フ可シ。政府ハ年貢運上ヲ取テ、正シク其使払ヲ立テ、人民ヲ保護スレバ、其<sup>B</sup> 職分ヲ尽シタリト云フ可シ。(A七ウ三・B七ウ五・24/1・24/2)

### [法]<sup>注8</sup>

(1) 元来人民ト政府トノ間柄ハ、モト同一体ニテ、其職分ヲ區別シ、政府ハ人民ノ名代ト為リテ法ヲ施シ、人民ハ必ズ此法ヲ守ル可シト、固ク約束シタルモノナリ。(十才二・25/10)

(四) 延べ語数 一、二七八

異なり語数 六〇四

三編 明治六年十二月刊

(一) 「国ハ同等ナル事」[権義]<sup>ライト</sup> (二 権理通義の略) は貧富強弱いずれの人の上にもある。国にも貧富強弱があり、それが国の有様というものだ。この有様は天然の約束ではないから変わりうるものだ。この有様が異なっても国の権義は同等である。国を富強にするため、学問に志さねばならぬ。まず一身独立して一国独立もなるのだ。

「一身独立シテ一国独立スル事」国中の人民に独立の気力がなければ一国独立の権義を保つことはできない。まず自国を護る気概が大切だ。愛国の気持ちのある者は、一身の独立に努め、余力があれば、

他人の独立心養成を助けなさい。

(二) \*アリ<sup>38</sup> \*或ハ<sup>7</sup> \*云フ<sup>11</sup> 一国<sup>7</sup> \*今<sup>8</sup> 恐ル<sup>7</sup> 驚ク<sup>6</sup> \*思

フ<sup>9</sup> 外国人<sup>6</sup> 氣力<sup>10</sup> \*国<sup>31</sup> 権義<sup>9</sup> \*コト<sup>40</sup> \*コノ<sup>15</sup> \*コレ

17 \*人民<sup>10</sup> \*ス<sup>8</sup> \*既ニ<sup>8</sup> \*其<sup>31</sup> \*タダ<sup>6</sup> \*他人<sup>7</sup> 智者<sup>6</sup> \*独

立<sup>23</sup> 独立ス<sup>6</sup> \*ナシ<sup>27</sup> \*ナス<sup>6</sup> \*人<sup>21</sup> 本国<sup>6</sup> \*モノ<sup>36</sup> 故

6 \*由ル<sup>8</sup> \*我が<sup>7</sup>

(三)〔氣力〕<sup>注9</sup>

(1) 前条ニ云ヘル如ク、国ト国トハ同等ナレトモ、國中ノ人民ニ独

立ノ氣力ナキトキハ、一国独立ノ権義ヲ伸ルコト能ハス。(三〇七・

29/2)

〔国〕

(1) 国トハ人ノ集リタルモノニテ、日本国ハ日本人ノ集リタルモノ

ナリ、英国ハ英国人ノ集リタルモノナリ。(二ウ三・27/6)

〔権義〕

(1) 二編ニアル権理通義ノ四字ヲ略シテ、コ、ニハ唯権義ト記シタ

リ。何レモ英国ノ「ライイト」ト云フ字ニ当ル。(これによれば、福澤の

の『明六雑誌』で、森有禮が「独立国権義」のように用いている。)一〇三・27/2)

〔独立〕<sup>注10</sup>

(1) 我日本人モ今ヨリ学問ニ志シ氣力ヲ慥ニシテ、先ヅ一身ノ独

立ヲ謀リ、随テ一国ノ富強ヲ致スコトアラバ、何ゾ西洋人ノ力ヲ恐

ル、ニ足ラン。(三〇一・28/12)

(2) 独立トハ、自分ニテ自分ノ身ヲ支配シ、他ニ依リスガル心ナキ

ヲ云フ。(三ウ一・29/4)

(3) サスレバ、此国ノ人口、名ハ百万人ナレトモ、国ヲ守ルノ一段

ニ至テハ、其人数甚ダ少ナク、迎モ一国ノ独立ハ叶ヒ難キナリ。(五

〇八・30/10)

「独立」はこの三編に多用されている。

(四) 延べ語数一、二八九

異なり語数五九六

四編 明治七年一月刊

(一)「学者ノ職分ヲ論ス」日本が独立できるか否か心配する識者がいる

が、国の独立は、政府と国民が互いに分限を守り、両立して力の平

均を保つことが必要だ。今の日本は、以前と同様、政府は専制、人

民は愚民で、この間に卑屈不信の氣風が漂っている。文明進歩のた

めには、この氣風を一掃せねばならぬ。しかし、今、この役割をす

べき洋学者の多くは政府側にいる。誰も人民の先頭に立ってこの弊

害を正すものはいない。それで、まず私が、私立の地位を確立して、

国民の分限を越えず、政府に頼らず、私立の事業を行いたい。私立

して、人民の向かうところを示し、この氣風を次第に消滅させて、



国民と政府の力を平均させ、ひいては国の独立を保ちたい。〔附録〕  
要旨省略

- (二) 明ナリ 10 \*アリ 87 \*或ハ 24 \*云フ 16 \*至ル 6 \*今 19 依頼ス 6 \*  
云ク 14 \*得 8 疑ヒ 9 \*学者 7 \*カノ 6 官 14 気風 12 \*国 10 答  
フ 6 \*コト 51 \*コノ 31 \*コレ 46 然ルニ 6 \*実 7 示ス 9 私立  
10 \*知ル 10 \*人物 9 \*人民 15 \*ス 19 \*既ニ 8 \*政府 53 \*其 71 \*タダ  
13 保ツ 7 \*足ル 16 \*付ク 7 尽ス 7 \*力 14 \*独立 13 \*所 19 名  
6 \*ナシ 25 \*ナス 23 \*ナル 6 日本 7 \*人 17 \*文明 10 方今 6 又  
(亦) 15 \*自ラ 6 \*見ル 11 \*モノ 51 \*世 11 \*由ル 6 洋学者流 6 我  
輩 15 \*私 13

### 三「官」

- (1) 此学者士君子、皆官アルヲ知テ私アルヲ知ラス、政府ノ上ニ立  
ツノ術ヲ知テ、政府ノ下ニ居ルノ道ヲ知ラサルノ一事ナリ。(六ウ  
十・40/6)
- (2) 是ヲ以テ、世ノ人心益其風ニ靡キ、官ヲ慕ヒ、官ヲ頼ミ、官ヲ  
恐レ、官ニ諂ヒ、豪モ独立ノ丹心ヲ発露スル者ナクシテ、(七ウ七・  
41/2)
- (3) 今ノ世ノ学者、此国ノ独立ヲ助ケ成サントスルニ当テ、政府ノ  
範圍ニ入り、官ニ在テ事ヲ為スト、其範圍ヲ脱シテ私立スルトノ利  
害得失ヲ述ヘ、本論ハ私立ニ左祖シタルモノナリ。(十ウ三・43/11)

近代語彙の一考察 — 『学問ノス・メ』の語彙の性格—

### 「氣風」<sup>注11</sup>

- (1) 其氣風トハ、所謂「スピリット」ナルモノニテ、俄ニコレヲ動  
ス可ラス。(四ウ三・38/7)
- (2) 此氣風ハ無形無体ニシテ、遽ニ一個ノ人ニ就キ、一場ノ事ヲ見  
テ、名状ス可キモノニ非サレトモ、其实ノ力ハ甚タ強クシテ、世間  
全体ノ事跡ニ顯ハル、ヲ見レハ、明ニ其虚ニ非サルヲ知ル可シ。(四  
ウ十一・38/10)
- (3) 未タ世間ニ民権ヲ首唱スル实例ナキヲ以テ、唯彼ノ卑屈ノ氣風  
ニ制セラレ、其氣風ニ雷同シテ、国民ノ本色ヲ見ハシ得サルナリ。  
(八ウ三・41/12)

### 「私立」<sup>注12</sup>

- (1) 我輩先ツ私立ノ地位ヲ占メ、或ハ學術ヲ講シ、或ハ商売ニ従事  
シ、或ハ法律ヲ議シ、或ハ書ヲ著シ、或ハ新聞紙ヲ出版スル等、凡  
ソ国民タルノ分限ニ越ヘサル事ハ、忌諱ヲ憚ラスシテコレヲ行ヒ、  
固ク法ヲ守テ正シク事ヲ処シ、(九ウ七・42/11)
- (2) 私立ノ人モ在官ノ人モ、等シク日本人ナリ。唯地位ヲ異ニシテ  
事ヲ為スノミ。其实ハ相助ケテ、共ニ全国ノ便利ヲ謀ルモノナレハ、  
敵ニ非ス真ノ益友ナリ。(十二オ五・45/1)

### 「人民」

- (1) 政ハ一国ノ働ナリ。コノ働キヲ調和シテ国ノ独立ヲ保タントス

ルニハ、内ニハ政府ノ力アリ、外ニ<sup>A</sup>人民ノ力アリ、内外相応シテ其力ヲ平均セサル可ラス。故ニ政府ハ猶生力ノ如ク、<sup>B</sup>人民ハ猶外物ノ刺衝ノ如シ。(A二ウ七・B二ウ九・36/15)

「政府」

- (1) 固ヨリ政ノ字ノ義ニ限リタル事ヲ為スハ政府ノ任ナレトモ、人間ノ事務ニハ政府ノ関ル可ラサルモノモ亦多シ。(二オ四・36/6)
- (2) 我輩ハ国民タルノ分限ヲ尽シ、政府ハ政府タルノ分限ヲ尽シ、互ニ相助ケ、以テ全国ノ独立ヲ維持セサル可ラス。(二オ八・36/8)
- (3) 政府威ヲ用レハ、人民ハ偽ヲ以テコレニ応セン。政府欺ヲ用レバ、人民ハ容ヲ作テコレニ従ハンノミ。(五ウ十一・39/10)

「私」

- (1) 今在官ノ人物少シトセス、私ニ其言ヲ聞キ其行ヲ見レバ、概皆闊達大度ノ士君子ニテ、(五オ一・38/12)
- (2) 方今、世ノ洋学者流ハ概皆官途ニ就キ、私ニ事ヲ為ス者ハ僅ニ指ヲ屈スルニ足ラス。(七オ四・40/9)

(1)は、今日なら、「私的」「プライベート」、(2)は、「私立」すなわち「政府側でなく民間」の意味である。

「国」「独立」「我輩」は用例を省略した。

以上挙げた語のうち、「官」に対しては「私立」・「私」、「政府」に対しては「人民」が、それぞれ対応して用いられている。福澤が、ここ

で、日本の独立を強めるため、「私立」(在官者でない者が、政府に頼らず、民間にあつて、独立して事業を行うこと)の力を育成する要のあることを論じたことがわかる。

福澤の言によれば、四編五編は、初々三編が民間向けの読本、教科書として書かれたのと異なり、学者向けに書いたもので、文体を改め、多少むづかしい文字を用いたとある(五編冒頭)。高橋美穂氏の調査(本学現代文化学部言語文化学科三年生)では、四編を十一編と比較して、助動詞「ベシ」の多用、とくに未然形「ベカラ(ズ)」の多用と、打消「ズ」の連体形「ザル」・已然形「ザレ」の多用を挙げ、十一編より硬い文体だとしている。

この編が発行されるや否や、「明六雑誌」第2号が、「是(四編のこと)先生此社ノ為ニ著ハス所ニシテ」と断つて、加藤弘之(「人民」用例(1)の中の「外物ノ刺衝」を「外刺」として用いた)、森有禮、津田真道、西周が、批評や回答を寄せており、反響の大きかったことを知ることができる。

(四) 延べ語数二、〇〇五

異なり語数七二七

五編 明治七年一月刊

(一)「明治七年一月一日ノ詞」(これは、慶応社中の集会で述べた詞を文

章化したもの。一国の文明は、どんなに諸制度が整つても、人民に独立の氣力がなければだめである。文明の外形を政府が作つても、これによって人民が痠縮震慄の心をもつてはだめである。政府は民間から生まれた文明を護るのだ。西洋の文明は、いわゆる「ミツヅルカラツス」から起こり、この人々は社友を集めて、活発に活動した。ワット、ステフェンソン、アダム・スミスみなしかりである。日本のこの階級の人々は学者だが、皆官途についている。慶應義塾は、独立の塾で独立の氣風を養っている。学者（ここでは、学問を学ぶ人々の意）は、よく方向を定めて、将来に期するところがなければならぬ。

- (二) 争フ 6 \*アリ 41 \*云フ 10 \*至ル 7 古 7 \*今 12 \*得 8 失フ 6  
外国 7 \*学者 7 容<sup>かたち</sup> 9 氣力 9 \*国 14 \*コト 22 \*コノ 18 コレ  
35 \*今日 6 \*人民 19 \*ス 12 \*政府 37 \*其 35 \*タダ 10 民 8 \*力 19  
\*独立 20 \*所 11 \*ナシ 16 \*ナス 9 \*ナル 7 \*文明 22 \*皆 6 \*モノ 34  
\*我が 8

### (三) 「政府」

- (1) 古来我国治乱ノ沿革ニ由リ、政府ハ屢改リタレトモ、今日ニ至ルマデ国ノ独立ヲ失ハザリシ由縁ハ、国民鎖国ノ風習ニ安ンジ、治乱興発、外国ニ関スルコトナカリシヲ以テナリ。(二オ十・47 / 4)

近代語彙の一考察 — 『学問ノス、メ』の語彙の性格—

- (2) 近来、我政府、頻リニ学校ヲ建テ、工業ヲ勸メ、海陸軍ノ制モ大ニ面目ヲ改メ、文明ノ形、略備リタレトモ、人民未タ外国ヘ対シテ我独立ヲ固クシ、共ニ先ヲ争ハントスル者ナシ。(三ウ四・48 / 9)
- (3) 古ノ政府ハ民ノ力ヲ挫ギ、今ノ政府ハ其心ヲ奪フ。(五ウ七・50 / 4)

### 「力」

- (1) 事々物々、皆外国ニ比較シテ処置セザル可ラザルノ勢ニ至リ、古来我国人ノ力ニテ僅ニ達シ得タル文明ノ有様ヲ以テ、西洋諸国ノ有様ニ比スレバ、(三オ一・47 / 13)

- (2) 古ノ政府ハ力ヲ用ヒ、今ノ政府ハ、力ト智トヲ用ユ。(五ウ四・50 / 3)

- (3) 時勢ノ世ヲ制スルヤ、其力、急流ノ如ク、又大風ノ如シ。(八ウ八・52 / 9)

### 「独立」

- (1) 此年号ハ我国独立ノ年号ナリ。此塾ハ我社中独立ノ塾ナリ。(二オ四・47 / 3)

- (2) 又コノ治乱ヲ経テ失ハザリシ独立モ、唯一国内ノ独立ニテ、未ダ他ニ対シテ鋒ヲ争ヒシモノニ非ズ。(二ウ四・47 / 9)

### 「文明」<sup>注13</sup>

- (1) 学校ト云ヒ、工業ト云ヒ、陸軍ト云ヒ、海軍ト云フモ、皆是レ文明ノ形ノミ。(二〇六・48/4)

- (2) 今、日本ノ有様ヲ見ルニ、文明ノ形ハ進ムニ似タレトモ、文明ノ精神タル人民ノ氣力ハ、日ニ退歩ニ趣ケリ。(四ウ七・49/7) [ミツヅルカラッス] (= middle class) と [中等] (使用度数6以下であるが、この編の重要語と考えて、補うことにした。)

- (1) コノ諸大家ハ所謂「ミツヅルカラッス」ナル者ニテ、国ノ執政ニ非ズ、亦力役ノ小民ニ非ズ正ニ国人ノ中等ニ位シ智力ヲ以テ一世ヲ指揮シタル者ナリ。(七オ三・51/4)

両語とも、使用度数は2回である。

- (四) 延べ語数一、二九五

異なり語数五八二

六編 明治七年二月刊

- (一) 「国法ノ貴キヲ論ズ」政府は国民の名代であり、国民の意志に従って事をなすものだ。また、良民を保護する職分がある。一方で、国民は自分たちの作った法律で、政府との約束によって、政府の保護を受けるものなのだ。この約束を違えてはならず、国民は政府の権限を犯してはならぬ。暗殺など私裁は許されない。法に不便な点があるなら、訴えて直すようにせねばならぬ。

- (二) \*アリ 55 \*或ハ 12 暗殺 6 \*云フ 9 \*得 6 訴フ 8 犯ス 6

恐ル 6 \*思フ 8 教師 9 \*国 9 刑 6 権 9 国法 9 \*国民 19 \*コト 56 \*コノ 28 \*コレ 41 殺ス 20 \*従フ 11 主人 7 \*職分 7 \*知ル 7 \*ス 20 \*既ニ 8 \*政府 49 賊 7 \*其 40 \*タメ 8 \*付ク 8 罪 19 貴シ 7 \*所 8 \*時 9 \*独立 8 捕フ 7 取押フ 6 \*ナシ 9 \*ナス 10 \*人 14 \*法 26 又(亦) 13 \*護ル 8 \*身 7 \*自カラ 8 \*モノ 46 破ル 7 \*私 15 \*我が 15

### (三) 「国民」

- (1) 右ノ如ク国民ノ總代トシテ政府ヲ立テ、善人保護ノ職分ヲ勤メシメ、其代トシテ、役人ノ給料ハ勿論、政府ノ諸入用ヲバ、悉皆国民ヨリ賄フ可シト、約束セシコトナリ。(二ウ四・54/8)

- (2) 国民ハ政府ト約束シテ、政令ノ権柄ヲ政府ニ任セタル者ナレバ、カリソメニモ此約束ヲ違ヘテ法ニ背ク可ラズ。(二オ八・55/10)

### 「殺ス」

- (1) 若シモ賊ヲ取押ヘシ上ニテ、怒ニ乗シテコレヲ殺シコレヲ打擲スルコトアレバ、其罪ハ無罪ノ人ヲ殺シ無罪ノ人ヲ打擲スルニ異ナラズ。(二ウ九・56/15)

- (2) 昔徳川ノ時代ニ、浅野家ノ家来、主人ノ敵討トテ吉良上野介ヲ殺シタルコトアリ。世ニコレヲ赤穂ノ義士ト唱ヘリ。大ナル間違ナラズヤ。(五オ二・57/15)

〔罪〕

- (1) 其職分ハ、罪アル者ヲ取押ヘテ罪ナキ者ヲ保護スルヨリ外ナラズ。(二オ二・54/2)
- (2) 国法ノ貴キヲ知ラザサル者ハ、唯政府ノ役人ヲ恐れ、役人ノ前ヲ程能クシテ、表向ニ犯罪ノ名アラザレバ、内実ノ罪ヲ犯スモコレヲ恥トセズ。(七ウ九・60/8)

〔国法〕

- (1) 身ハ国民ノ地位ニ居ナガラ、国法ノ重キヲ顧ミズシテ、妄ニ上野介ヲ殺シタルハ、国民ノ職分ヲ誤リ、政府ノ権ヲ犯シテ私人ノ罪ヲ裁決シタルモノト云フ可シ。(五ウ九・58/12)

〔法〕

- (1) 故ニ国民ノ政府ニ従フハ、政府ノ作りシ法ニ従フニ非ス、自カラ作りシ法ニ従フナリ。(二オ一・55/4)

〔私||個人または個人的〕

- (1) 若シ心得違シテ私ニ罪人ヲ殺シ、(二ウ四・55/13)
  - (2) 私ノ力ニシテ既ニ此強盗ヲ取押ヘ、(三ウ五・56/13)
- 〔私裁〕(使用度数5であるが重要語と考える。私の制裁。リンチの意。福澤の造語か。)

- (1) 即チ国ノ法ヲ犯シ自カラ私ニ他人ノ罪ヲ裁決スル者ニテコレヲ私裁ト名ケ其罪免ス可ラズ(ニウ六・55/15)

近代語彙の一考察 — 『学問ノス、メ』の語彙の性格—

〔政府〕は用例を省略。

(四) 延べ語数 一、六四〇

異なり語数 六一二

七編 明治七年三月刊

(一)「国民ノ職分ヲ論ズ」(六編の補遺) 国民は一人で二人前の役目を勤めるものだ。一つは、客分の立場、今一つは主人の立場である。客分としての人民は、国法を重んじ、これに従い、人間同等の精神を忘れてはならぬ。主人としての人民は、自分たちの名代人として政府は公務を担当するものとみなすべきだ。政府は人民の委任で人々の権義が遅しく育つようにし、客分としての人民は、税金を払うのが義務だ。ただ、政府が分限を越えて暴政を行ったらどうするか。そのときは、節を屈して政府に従ってはならず、徒党を結んで政府を倒すこともならない。正理(=正しい道理)を守って身を棄てて政府に迫らなければならない。

- (二) \*アリ 40 \*或ハ 9 \*云フ 22 師 8 至ル 7 一人 6 \*一国 7 \*今 6 起ス 8 \*必ズ 8 金 9 \*国 8 国法 9 \*コト 42 \*コノ 20 \*コレ 25 \*従フ 11 支配人 7 社中 7 主人 12 商社 11 \*人民 24 \*ス 17 棄ツ 8 \*政府 44 \*其 58 \*タダ 10 \*タメ 6 \*力 9 \*所 12 内乱 6 \*ナシ 29 \*ナス 8 \*人 18 百人 6 \*文明 6 \*法 10 \*又 (亦) 17 \*護ル 6

\*身<sup>11</sup> \*見ル<sup>9</sup> \*モノ<sup>52</sup> 役人<sup>8</sup> \*由ル<sup>6</sup> \*理<sup>9</sup> \*論ズ<sup>10</sup> \*我が<sup>8</sup>

(三) 「主人」

(1) 国中ノ人民申合セテ一國ト名ツクル会社ヲ結び、杜ノ法ヲ立テ、コレヲ施シ行フコトナリ。即チ主人ノ積リナリ。(二ウ一・63／

6)

〔商社〕<sup>注14</sup>

(1) 既ニコノ法ヲ定メテ、社中ノ人、何レモコレニ從ヒ、違背セザル所ヲ見レバ、百人ノ人ハ商社ノ客ナリ。故ニ一國ハ猶商社ノ如ク、人民ハ猶社中ノ人ノ如ク、一人ニテ主客二様ノ職ヲ勤ム可キ者ナリ。

(一ウ五・64／1)

〔商社〕「支配人」は政府、「社中」は国民にたとえており、対語。さきの「主人」は「客」と対語で用いている。

〔支配人〕

(1) 譬ヘバ商社百人ノ内ヨリ撰バレタル十人ノ支配人ハ政府ニテ、残九十人ノ社中ハ人民ナルガ如シ。(三オ八・65／10)

〔社中〕

(1) 又彼ノ十人ノ支配人ハ、現在ノ事ヲ取扱フト雖トモ、モト社中ノ頼ヲ受ケ、其意ニ從テ事ヲ為ス可シト約束シタル者ナレバ、其実ハ私ニ非ズ、商社ノ公務ヲ勤ル者ナリ。(三ウ三・65／13)

〔身〕

(1) 斯ノ如ク世ヲ患テ身ヲ苦シメ或ハ命ヲ落スモノヲ、西洋ノ語ニテ「マルチルドム」ト云フ。失フ所ノモノハ唯一人ノ身ナレトモ、其功能ハ、千万人ヲ殺シ千万兩ヲ費シタル内乱ノ師ヨリモ遙ニ優レリ。(八ウ二・70／10)

〔人民〕〔政府〕は用例を省略。なお〔身〕の用例中の「マルチルドム」は使用度数2だが重要語。

(四) 延べ語数 一、七六四

異なり語数 七二三

八編 明治七年四月刊

(一)「我心ヲ以テ他人ノ身ヲ制ス可ラズ」アメリカのウエイランドの「モラルサイヤンス」という書は、人の身心の自由について述べている。人間は、他人と別個に、一人前の全体を成し、自ら自分の身を扱い、自ら心を用い、自ら自分を支配し、務むべき仕事をなすものだという論旨である。己れ一人の分限を越えなければ人は自由なのだ。しかし、名分(Ⅱ身分・立場で異なる本分)によって圧力をかけられていることが多い。男女の間、親子の間で、儒教思想によって圧力がかかる悪弊があるのではないか。まず人間家内の道を正さねばならない。

(二) 遊ブ<sup>8</sup> \*アリ<sup>43</sup> \*或ハ<sup>9</sup> \*云フ<sup>38</sup> 家<sup>8</sup> \*今<sup>6</sup> \*得<sup>6</sup> 生ル<sup>7</sup>

子 20 \*心 19 \*コト 38 \*コノ 19 \*コレ 38 \*従フ 14 情欲 7 \*ス 27 制  
 ス 12 \*其 41 \*他人 11 魂 6 力 6 \*時 7 \*働 9 \*人 33 婦人 6 父  
 母 10 \*身 10 \*自ラ 8 \*以テ 7 媳 7 \*理 8

(三)「心」意志」

- (1) 仮ニ其一例ヲ挙テ云ハン。禁裏様ハ公方様ヨリモ貴キモノナル  
 ュヘ、禁裏様ノ心ヲ以テ公方様ノ身ヲ勝手次第ニ動かシ、行カント  
 スレバ止レト云ヒ、止マラントスレバ行ケト云ヒ、寝ルモ起ルモ飲  
 ムモ喰フモ、我思ヒノマ、ニ行ハル、コトナカラシ。(三ウ九・75/  
 13)
- (2) 人ノ身ト心トハ全ク其居処ヲ別ニシテ、其身ハ恰モ他人ノ魂ヲ  
 止ル旅宿ノ如シ。(四ウ七・76/9)

「他人」

- (1) 数千百年ノ古ヨリ和漢ノ学者先生ガ、上下貴賤ノ名分トテ喧シ  
 ク云ヒシモ、詰ル処ハ他人ノ魂ヲ我身ニ入レントスルノ趣向ナラン。  
 (五オ八・76/15)

- (2) 人タル者ハ、他人ノ権義ヲ妨ゲザレバ、自由自在ニ己ガ身体ヲ  
 用ルノ理アリ。(三オ七・75/6)

「人」

- (1) 人トシテ世ニ居レバ固ヨリ朋友ナカル可ラズト雖トモ、其朋友  
 モ亦吾ニ交ヲ求ルコト、猶我朋友ヲ慕フガ如クナレバ、世ノ交ハ相

近代語彙の一考察 — 『学問ノス、メ』の語彙の性格—

互ヒノコトナリ。(二ウ八・74/15)

- (2) 今世間ヲ見ルニ、力ヅクニテ人ノ物ヲ奪フ歟、又ハ人ヲ恥シム  
 ル者アレバ、コレヲ罪人ト名ヅケテ刑ニモ行ハル、事アリ。(六オ  
 四・77/11)

- (1)は、一個の人間、(2)は、他人の意。

「身」

- (1) 斯ノ如キハ則チ日本國中ノ人民、身躬カラ其身ヲ制スルノ権義  
 ナクシテ、却テ他人ヲ制スルノ権アリ。(四ウ五・76/8)
- (2) 人ノ身ト心トハ全ク其居処ヲ別ニシテ、其身ハ恰モ他人ノ魂ヲ  
 止ル旅宿ノ如シ。(四ウ七・76/9)

「名分」(使用度数3だが重要語)

- (1) 数千百年ノ古ヨリ和漢ノ学者先生ガ上下貴賤ノ名分トテ喧シク  
 云ヒシモ(五オ七・76/15)

(四) 延べ語数 一、六七〇

異なり語数 七二七

九編 明治七年五月刊

- (一)「学問ノ旨ヲ二様ニ記シテ中津ノ旧友ニ贈ル文」人間の心身の働き  
 は二様に分けることができる。一は、一人としての身(個人)の働  
 きで、衣食住に安樂を求め、独立の計(生計)を営むことである。

もう一つは、人間交際の仲間の一人(「社会の一員」として、自身の働きを活発にすることであり、この人間交際のために、学問をするのだ。開闢当初は、まだ人智が開けていなかったが、西洋は日新の勢いで文明を進め、人智を開き、交際を活発にしてきた。とくに一八〇〇年以降の文明は長足の進歩だ。我が国も近年、西洋の説が行われるようになり、天下の人心の方向が変わってきた。維新の諸改革は、文明に促された人心の変動とみることができる。しかし、その後は依然としてこの域にとどまっている。人心を文明の高尚の域に進めるために、小成に安んぜず、学者は世のために勉強せねばならぬ。

- (二) \*アリ 32 \*有様 6 \*或ハ 10 \*云フ 20 石 12 衣食住 6 愈 8 \*今 12 \*得 14 交際 7 古人 8 \*コト 26 \*コノ 23 \*コレ 26 \*人物 6 \*ス 11 \*其 36 \*タメ 8 \*作ル 8 \*時 7 人間交際 6 \*働 6 \*人 19 \*文明 9 変動 6 \*自ラ 8 \*以テ 9 我輩 7

### (三)「交際」

- (1) 人智愈開レバ交際愈広ク、交際愈広ケレバ人情愈和ラギ、万国公法ノ説ニ権ヲ得テ、戦争ヲ起スコト軽率ナラズ。(六ウ四・87/14)

### 〔人間交際〕<sup>注15</sup>

- (1) 人ノ性ハ群居ヲ好ミ決シテ独歩孤立スルヲ得ズ。夫婦親子ニテハ未ダコノ性情ヲ満足セシムルニ足ラズ、必ズシモ(必ズの意味に用

いてる。他にもこの用法が見られる。)広ク他人ニ交リ、其交リ愈広ケレバ一身ノ幸福愈大ナルヲ覚ユルモノニテ、即チコレ人間交際ノ起ル由縁ナリ。(四オ十・86/2)

- (2) 凡ソ何人ニテモ聊カ身ニ所得アレバ コレニ由テ世ノ益ヲナサン ト欲スルハ人情ノ常ナリ。人ニ此性情アレバコソ人間交際ノ義務ヲ達シ得ルナリ。(五オ五・86/11)

### 〔働〕<sup>注16</sup>

- (1) 心身ノ働ヲ以テ衣食住ノ安楽ヲ致スモノ、コレヲ一人ノ身ニ就テノ働ト云フ。(二オ七・83/4)

- (2) 兎ニモ角ニモ一軒ノ家ヲ守ル者アレバ、自ラ独立ノ活計ヲ得タリトテ得意ノ色ヲ為シ、世ノ人モコレヲ目シテ不羈独立ノ人物ト云ヒ、過分ノ働ヲ為シタル手柄モノ、ヤウニ称スレトモ、其実ハ大ナル間違ナラズヤ。唯此人ハ蟻ノ門人ト云フ可キノミ。(三オ四・85/2)

### 〔変動〕<sup>注17</sup>

- (1) 前ニモ云ヘル如ク、西洋ノ説漸ク行ハレテ、遂ニ旧政府ヲ倒シ諸藩ヲ廃シタルハ、唯コレヲ戦争ノ変動ト視做ス可ラズ。文明ノ功能ハ、僅ニ一場ノ戦争ヲ以テ止ム可キモノニ非ズ。(八ウ十・89/12)

〔変動〕は、この編以外に用いていない。

〔文明〕は用例を省略。

- (四) 延べ語数 一、三一六



十編 明治七年六月刊

(一)「前編ノ続 中津ノ旧友ニ贈ル」前編では、一身一家の活計に満足せず、人間交際の仲間に入り、社会的に活発に活動して世の中につくすために、学問の志を高遠にせよと、説いた。一般に洋学者たちは、三年程度の学問で教師になるが、さらに、三年、五年の執行(＝修業)をして、真の実学を修めるなら、学問は大成するだろう。日本国中の人々の智徳に力がついて、はじめて西洋文明に対抗できる。学者は一家独立の家計を立てるのみならず、日本国が自由独立の地位を保てるように協力して努力せねばならぬ。学者は西洋文明を学ぶため、尋常学校の教育だけで満足してはならないのだ。

(二) \*或ハ 8 \*アリ 30 \*云フ 12 \*今 12 \*未ダ 8 \*得 7 \*学者 16 \*学問 14 \*コト 20 \*コノ 22 \*コレ 27 \*其 32 \*タメ 10 \*付ク 6 天下 7 \*人 19 \*自ラ 7 固ヨリ 6 \*我が 9

### (三)「学者」

(1) 昔封建ノ世ニ於テハ、学者或ハ所得アルモ、天下ノ事皆ギリツメタル有様ニテ、其学問ヲ施ス可キ場所ナケレバ、止ムヲ得スシテ学ヒシ上ニモ又学問ヲ勉メ、(二ウ七・92/1)

(2) 今我国内ニ雇入タル外国人ハ、我学者未熟ナルガ故ニ、暫ク其

近代語彙の一考察 —『学問ノス、メ』の語彙の性格—

名代ヲ勤メシムル者ナリ。(五ウ五・94/12)

### 「学問」

(1) 当時流行ノ訳書ヲ読ミ世間ニ奔走シテ、内外ノ新聞ヲ聞キ、機ニ投シテ官ニ就ケバ則チ巖然タル官員ナリ。斯ル有様ヲ以テ風俗ヲ成サバ、世ノ学問ハ遂ニ高尚ノ域ニ進ムコトナカル可シ。(二ウ一・92/8)

### 「天下」

(1) サレトモ一家ノ世帯ハ易クシテ天下ノ経済ハ難シ。(一ウ三・91/7)

(2) 試ニ見ヨ、方今天下ノ形勢、文明ハ其名アレトモ未タ其实ヲ見ス。(四オ五・93/11)

(1)は、国家、(2)は、世の中の意。

### (四) 延べ語数 一、一八五

異なり語数 五八三

十一編 明治七年七月刊

(一)「名分ヲ以テ偽君子ヲ生スルノ論」八編で、上下貴賤の名分に縛られて、夫婦親子の間に弊害の生じることを、例に引いた。人間の交際は、他人どうしの交際だから、親子のつきあいと異なる。名分は頼みがたく、ここから生じる専制抑圧は毒であり、偽君子も出てく

る。名目のみの虚飾の名分は専制抑圧に繋がるが、名分を職分と考  
えるなら、名分を立てることは差し支えない。人間交際には、かな  
らず規則約束を作って、ルールに従って行動すべきだ。国法の必要  
なゆえんである。仁政など、小刀細工である。

(二) \*アリ 41 \*云フ 18 親子 6 \*交際 6 \*コト 25 子供 8 \*コノ 16 \*  
コレ 20 実 10 \*職分 11 \*ス 11 \*政府 7 \*其 39 \*人民 10 \*所 6 \*ナシ  
22 \*人 8 \*モノ 25 \*タダ 7 \*他人 9 旦那 9

(三) 「交際」「実」「職分」「他人」紙面の都合で用例を略す。

(四) 延べ語数 一、二〇八

異なり語数 六六九

十二編 明治七年十二月刊(二題目を立てる。)

(一)「演説ノ法ヲ勸ルノ説」議院の開設には、まず演説の法が立ってい  
なければならぬ。演説によって人は内容を理解し、感動するものだ。  
学問は活用にあるのだ。精神の働きである。この働きを实地に施す  
るに大切なことは、事物の視察(＝ラプセルウエーション observation)と事物を推究して自説を確立する(＝リーズニング reasoning)ことだ。読書により智見を集め、談話で意見を交換し、著書や演  
説で、国民を高尚の域に導かなければならぬ。

「人ノ品行ハ高尚ナラザル可ラザルノ論」人の見識品行をみると、

言行不一致なるものがある。これを高尚にするのにはどうしたらよ  
いか。それは、自分と他とを彼我比較して自分を上流に向かわせる  
ことだ。これは個人の比較のみではない。学校の比較も必要だし、  
国についても文明国との比較が必要だ。学者は外国人の活発さに恐  
れをいだきながらも、西洋文明を慕うなら彼我比較して、高上に向  
かうよう努めねばならぬ。

(二) \*アリ 43 \*有様 12 \*或ハ 16 \*云フ 23 \*今 7 \*得 6 演説 7 \*学者  
7 \*学問 11 学校 13 \*国 8 見識 8 高尚ナリ 8 \*コト 31 \*コノ  
20 \*コレ 24 \*知ル 7 \*ス 11 説 6 \*其 51 取締 6 述ブ 7 比較ス  
16 品行 7 \*人 22 \*法 9 誇 6 名分 15 \*故 2 15

(三) 「演説」<sup>注18</sup>「見識」<sup>注19</sup>「比較ス」<sup>注19</sup>「品行」<sup>注19</sup>「名分」<sup>注19</sup>

(四) 延べ語数 一四〇五

異なり語数 六六二

十三編 明治七年十二月刊

(一)「怨望ノ人間ニ害アルヲ論ズ」人間交際の最大の不徳は怨望である。  
疑猜、嫉妬、恐怖、卑怯の類はすべてここから始まる。これが破裂  
すると、徒党、暗殺、一揆、内乱などが起こって、禍いが全国に及  
ぶ。怨望が起る原因は、人間の天然の精神の働きに自由を与えな  
いため、窮に押しめられるからである。政府も人民も学者も、す

べての人々の間に活発な氣力が起こるよう、自由に言えるよう、自由に働けるように、また、それを妨げることのなきよう努めねばならぬ。

(二) \*アリ 64 \*有様 7 \*或ハ 7 \*云フ 19 何レ 6 \*至ル 6 \*今 6 \*得

9 怨望 18 \*必ズ 7 下人 6 \*交際 7 \*心 7 御殿 6 \*コト 30 \*コ

ノ 11 好ム 7 \*コレ 32 \*生ズ 10 \*知ル 8 \*ス 13 \*錢 6 \*其 44 \*他人

9 \*人間 10 \*働キ 9 \*人 20 不徳 9 \*故ニ 6 \*我ガ 6

(三) 「有様」<sup>注20</sup>「怨望」<sup>注20</sup>「他人」「人間」「働」「不徳」

(四) 延べ語数 一四三七

異なり語数 六六〇

十四編 明治八年三月刊

(一) 「心事ノ棚卸」人間には往々計画と実行が伴わぬことがある。それは、事の難易と、時間の長短とを比較したり見極めたりしないことから起こるのだ。これは、仕事を易しとみた罪である。これと同じように、人は案外愚行をなし、徳義上の悪事をなし、また、計画を実行しないものだ。人は胸中で、時に事業の成否得失について差引勘定することが必要である。

「世話ノ字ノ義」世話という字(Ⅱ語)には、保護と命令との二つの意味がある。保護は、直接手を出さず傍で見守ること、命令は人に

近代語彙の一考察 — 『学問ノスゝメ』の語彙の性格 —

指図すること、この境界を間違えぬようどちらにも偏ってはならない。これは国家の政治にも当てはまる。これは経済論の最も大切な箇条だ。しかし、留意すべき事項は、私徳で、これによる仁恵は大切な行為だが、行うべき場所を弁えることが肝要である。

(二) 相対ス 7 与フ 6 誤ル 7 \*アリ 39 存様 8 \*或ハ 19 \*云フ

14 \*至ル 6 \*今 6 \*内 7 \*多シ 6 \*思フ 12 義 7 企ツ 10 \*心

11 \*コト 55 \*コノ 19 \*コレ 20 指図 16 \*商売 9 \*自分 6 \*知ル

11 \*ス 26 過グ 6 世話 21 \*其 41 \*時 13 \*人 15 保護 17 \*身 6

\*自ラ 6

(三) 「相対ス」「有様」「企ツ」「指図」「世話」「時」「保護」(Ⅱ「言

海」へ明治22—24に、ハウゴ、ホゴ両形、ヘボンの『和英語林集成』

三版に、Hogoとある。ハウゴと読むべきか)

(四) 延べ語数 一五七五

異なり語数 七二一

十五編 明治九年七月刊

(一) 「事物ヲ疑テ取捨ヲ断スル事」信の世界に偽詐が多く疑の(Ⅱ疑いをもち)世界に真理が多いものだ。世の愚民は、人の言を信じ、書物を信じ、小説(Ⅱつまらぬ説)風聞を信じ、神仏を信じ、卜筮を信じるが、これは偽を信じているのだ。文明の進歩は、有形でも無形(Ⅱ精

の精神から生じたことだ。地動説、引力の発見、宗教改革、アメリカの独立、すべてここから生じている。アジアの人民が、丕<sup>ふ</sup>蠱<sup>こ</sup>神仏に惑溺し、聖賢の言に盲従するのは、まったく異なる。異説争論の中で事物の真理を究めることが大切だ。しかし、日本文明と比較して、西洋文明も決して完全なものではない。今の改革者たちが、日本の旧習をきらい、西洋の文明を慕うが、その中できちんと信疑取捨を行わねばならぬ。学者は勉強を怠つてはならぬ。

(二) \*アリ<sup>44</sup> \*或ハ<sup>8</sup> \*云フ<sup>22</sup> \*至ル<sup>10</sup> \*今<sup>12</sup> \*未ダ<sup>9</sup> 疑<sup>17</sup> 疑フ

11 \*多シ<sup>7</sup> \*学者<sup>6</sup> \*コト<sup>37</sup> \*コノ<sup>19</sup> \*コレ<sup>38</sup> \*今日<sup>8</sup> 事物<sup>10</sup>  
習慣<sup>6</sup> \*知ル<sup>7</sup> 信<sup>7</sup> 信ズ<sup>28</sup> \*人民<sup>16</sup> 真理<sup>7</sup> \*ス<sup>13</sup> 西洋<sup>13</sup>

\*其<sup>49</sup> 習フ<sup>10</sup> 日本<sup>14</sup> 日本人<sup>9</sup> \*人<sup>9</sup> 開ク<sup>6</sup> 風<sup>10</sup> \*用フ<sup>9</sup>

(三) 「疑」「疑フ」「信ズ」「真理」<sup>注21</sup>「西洋」「日本」

(四) 延べ語数 一、七四〇

異なり語数 八五八

十六編 明治九年八月刊 (二題目を立てる。)

(一)「手近ク独立ヲ守ル事」不羈独立という語は、世間でよくきくことばだ。しかし誤解もある。独立には、有形(物質的)の独立と無形(精神的)の独立とがある。無形の独立は意味が深く関係するところは広い。欲心から起る品物に支配される行動は一身一家内のこと

だ。しかし他を真似たり、妄想に精神を支配されるのは困る。錢に制せられず、精神を独立させることが肝要だ。

「心事ト働ト相当ス可キノ論」議論と実業(思うところを外にあらわす、実際の行為)とは平衡を保たねばならぬ。説と人の働き(「行為・活動」との平均を失うと弊害が起る。人の働きには大小軽重の別があるから、まず心を高尚にし、有用と無用を明察する心を持たねばならぬ。人の働きは、場所と時節を弁えねばならぬ。心事(「心中に思うこと」)ばかり高大で、働きの乏しい所に弊害が起る。自分の働きの分限を知つて努力すれば、精神が活発になり、心事と働きが平均するものだ。

(二) \*アリ<sup>33</sup> \*或ハ<sup>10</sup> \*得<sup>11</sup> \*云フ<sup>25</sup> \*至ル<sup>7</sup> 厭フ<sup>6</sup> 憂フ<sup>7</sup> \*思

フ<sup>9</sup> 議論<sup>7</sup> 高尚ナリ<sup>6</sup> \*心<sup>8</sup> \*コト<sup>26</sup> \*コノ<sup>12</sup> \*コレ<sup>25</sup> 品物

6 心事<sup>20</sup> 制ス<sup>6</sup> \*其<sup>31</sup> \*他人<sup>8</sup> \*独立<sup>13</sup> \*取ル<sup>6</sup> \*働<sup>32</sup> 甚ダ

6 \*人<sup>45</sup> 欲ス<sup>7</sup> \*自ラ<sup>6</sup> 求ム<sup>7</sup>

(三) 「議論」「心」「心事」「独立」「働」

(四) 延べ語数 一、三六五

異なり語数 六四八

十七編 明治九年十一月刊

(一)「人望論」人望は、活発な才智の働くと、正直な本心の徳を積んで

得べきものだ。人望は智恵と徳によって得るのだ。どうしたら榮譽や人望を得られるか。まず、日本語の習得である。次には、顔色容貌が人に不快感を与えぬように努めることで、これは心身の働きである。最後に、人は互いに接し合わなければ、意志を疎通することはできず、互いに人物を知ることができぬ。従って人間交際を広くして活発に行動しなければならない。

(二) \*アリ 57 \*或ハ 10 \*云フ 21 \*今 7 \*得 9 榮譽 7 \*多シ 6 言語

6 \*交際 6 \*コト 34 言葉 8 \*コノ 21 \*コレ 25 \*知ル 21 \*ス 40 人

望 14 \*世間 8 \*其 32 タメ 6 働 9 \*人 49 弊害 6 本色 6 交ル

6 \*用フ 6 求ム 8 容貌 8 良シ 6

(三)「榮譽」「言語」「言葉」「人望」「世間」「働」「人」

(四) 延べ語数 一、五九五

異なり語数 七六八

規定枚数をオーバーしてしまい、十一編からは、重要語の用例を割愛せざるを得なかったが、一応、この項を終えることとする。

#### 四 おわりに

『学問のス・メ』の用語は、たとえば、「人間交際」「働」「一人トシテノ身・人・私」などが示すように、「社会(生活・活動)」「行為・活

近代語彙の一考察 —『学問ノス・メ』の語彙の性格—

動・機能」「個人」など、現代語の中核をなす概念の命名が不安定な時代の用語で、過渡期の様相を示している。近代思想を鋭く提示し、学問は何のためにするのか、今日でも傾聴すべき論を展開しながら、用語には、新鮮さはあまり感じられない。これは、彼の啓蒙精神と深くかかわる用語の選択なのだ。それは、「天ハ人ノ上ニ」といったキャッチフレーズの表現、比喩や対句等による表現の巧みさなどと底流で連続する事項である。ここには取り上げることができなかったが、外国語の使用の少ないことも、洋学者の中では目立つことがらであろう。日常卑近な用語を努めて使った平易さが、論旨の明確さと相まって、卓越した啓蒙文として成功し、息長く読まれているという点に深く注目したい。

注1 言語そのものによる、または言語によって表現される文化の意とする。古田東朔「日本の言語文化」に拠る。古田東朔編著『日本の言語文化』所収 一九八九年刊、放送大学教育振興会

注2 実用の学問、西洋日新の学問、またサイエンスの意に用いる。

注3 参照・『リベルチ』とは自由と云ふ義にて、漢人の訳に自主、自尊、自得、自若、自主宰、任意、寛容、従容、等の字を用ひたれども、未だ原語の意義を尽すに足らず。自由とは、一身の好むまゝに事を為して窮屈なる思なきを云ふ。、『西洋事情二編 卷之一』(『西洋事情』は、「初編」が慶応二年、「外編」が同三年、「二編」が明治三年の刊記があり、福澤諭吉纂輯とある。)岩波版『福澤諭吉全集第一卷』再版 昭和四四年

刊使用。 486 p.

注4 アメリカの独立宣言中の一節、また、中村敬宇『西国立志編』（明治四年）の冒頭「天（＝Heaven）ハ自ラ助クル者ヲ助ク」などの影響を考へる。「天ヨリ人ヲ生スルニハ各安樂ニ此世ヲ渡ラシメ給フノ趣意ナリ」と、動作主への敬意表現を用いる擬人法のある点など、造物主の意を宿すと考へる。参照・伊藤正雄『学問のすゝめ』講説』昭和四三年刊 風間書房 23～31 p.

注5 有様＝天から与えられた人権は万人平等だが、貴賤・上下・貧富などの差は、有様として存在する意。

注6 『学問ノス、メ』には、権理四例と権利一例（四編）が用いられている。rightの訳語。

通義もrightの訳。『ライト』とは元来正直の義なり。又此字義より転じて、求む可き理と云ふ義に用ることあり。漢訳に達義、通義等の字を用ひたれども、詳に解し難し。』（『西洋事情』一編卷之一・岩波版『福澤諭吉全集』前出 488 p.

『哲学字彙』（東京大学三学部印行・井上哲次郎識・明治十四年四月刊）のrightには、権利、公道、通義とある。

福澤は、通義だけでは意を尽くさずと考へ、ここで、権理通義としたのではないか。これを略して権義としたのが、「三編」に見える。

注7 職分＝duty 参考・“Individual Rights and Duties”の訳に、「人生の通義及び職分」（『西洋事情外編』）とある。原書は“Chamber's Educational Course の一冊”『Political Economy 1870年版。国会図書館蔵本を使用。』「外編」はこの原書の翻訳であり、福澤用語を知るための有効な資料である。なお、Medhurst の *English and Chinese Dictionary*（一八四七年刊・国会図書館蔵本）に、dutyの訳語の一つに職分があることを指摘して置く。日本語として普通の語であり、二葉亭四迷の『浮雲』にも会話の中で使われている。

注8 法・国法（六編）＝law の訳語。参考・“Laws and National Institutions”「国法及風俗」（『西洋事情外編』）原書は注7に同じ。

注9 気力はpowerで、能力の意。参考・Man, in being placed upon the earth by his Divine creator, has been invested with certain powers……「人の生ずるや天より之に与ふるに氣力を以て」（『西洋事情外編』）原書は注7に同じ。

注10 独立＝independentの訳。彼の精神を示す重要語。『荀子』など漢籍に典がある。ヘボンの『和英語林集成』（初版・一八六七年刊）に、doku-riu（独立）を掲げ、Sho-koku da kara wa dekinuの用例を載せる。三版もdokuryuである。『辞書言海』（明治二一―二四年刊）は、ドクリツの語形で見出し語を立てている。

注11 気風は、用例(1)に見ることく、spiritの訳。『文明論之概略』（明治八年刊）の「一国人民の智徳を論ず」中に、気風が論じられている。

注12 たとえば、大槻文彦『辞書言海』（明治二一―二四年刊）には、「私立＝私ニ作り立ツルコト。（官立、公立ナドニ対ス）」とだけあるが、福澤の用法は、本文で記したことく、「民間にあつての独立」の意。「日本国語大辞典」には、この意を載せる。

注13 文明は、文明開化とともに、civilisationの訳。参考・“Civilisation”「世の文明開化（タイトル）」。It has also been asserted that the barbarous state is natural, while that of civilisation is artificial: 「又或人の説に、蠻野は天然なり、文明は人為なりと云ふ者あれども」（『西洋事情外編』）原書は注7に同じ。

注14 商社＝商人会社の略。参考・「之を商人会社と名づく。既に商社を結べば」（『西洋事情初編卷之一』）岩波版『福澤諭吉全集第一巻』前出 296 p.

注15 人間交際、社会の意。参考・a science of social and political economyを「人間交際及び経済の学」として、人間交際学という社会科学

学の一部門を訳した。（『西洋事情外編』）原書は注7に同じ。societyの訳語としても用いた。参照・斎藤毅「社会という語の成立」『明治のことは』所収昭和五二年刊 講談社。これによれば、明治八、九年のころの成立。

注16 働は、活動・機能（例①）、仕事（例②）などの意で、福澤は多用している。

注17 変動は、『荀子』など漢籍に典故があり、『文明本節用集』に「ヘントウ」の語形で載る。大規盤溪の『近古史談』に、「変動不測之雷」と用いており、現代は、一般用語のほか、「変動相場制」などと、経済用語に多く用いる。

注18 演説は、福澤の訳語ではないが、日本の社会にこの形態を普及させた功績は大きい。

注19 比較は、『顔氏家訓』など漢籍に典故のある語。佐藤喜代治氏は吉田松陰の書簡に「此ニツラ以テ致比較候へバ」のように用いられていると指摘しておられる（『現代語の語彙の形成』講座現代語・現代語の成立』所収）。前出の『言海』にもある普通のことば。

注20 怨望は、『史記』など漢籍に典故のある語で、『日本外史』や富田高慶の『報徳記』（一八五六年成立）などに用いられ、前出の『言海』にもある普通のことば。

注21 真理は、仏教語として古くから用いられた漢語だが、近代語として訳語の意味も担うようになった。前出（注7）の Medhurst の辞書では truth の訳語の一つに「真理」がある。

〔参考文献〕

伊藤正雄「福沢のモラルとウェーランドの『修身論』——主として『学問のすゝめ』および『中津留別の手紙』の典拠に関する一研究——」『福澤論吉論考』所収 昭和四四年刊 吉川弘文館